随筆

名前を残すということ
―医生教習所記念碑によせて―

公立久米島病院 院長
村田　謙二

記憶はすでにおぼろげだが、小学校の高学年の頃、父に連れられて波上宮境内にある沖縄医生教習所記念碑を見に行った。碑文の文面は漢字カナ混じり文で、難文である上に所々に刻字の欠落があって意味不明、小学生の私に読めるはずもなかった。父は碑の裏側に私を連れて行き碑の真ん中あたりを指し示した。そこに祖父の村田精成の名があった。

それまで、私にとっての祖父は、孫の来訪を笑顔で迎えるものの、会話らしい会話も成立しない好々爺とした老人でしかなかった。昔医師だったと聞いてはいたが、まるで現実味がなかった。しかし、碑文の前で父から聞かされた祖父像は違っていた。

さて、医生教習所、その記念碑といってもご存知ない読者もいると思われるので、ここで少し付記しておきたい。以下の内容は平成11年9月に発刊された沖縄県医師会報の特別増刊号「沖縄医生教習所碑再建記念誌」に拠っている。

明治18年沖縄で初めての近代西洋医学教育機関として医学講習所が沖縄県医院内に設置された。明治22年には沖縄県病院付属医生教習所と改められ、場所は何度か変わったが、明治34年からは松下町（現松山公園）にあったという。明治45年の医術開業試験法の改正に伴い、閉校になるまでの28年間に565名が在学し、そのうちわずか約30％の172名が医師の資格を取得した。ちなみに東京の同等の施設「済生学舎」の場合でも取得率は44％であったという。

記念碑は昭和3年当教習所出身の有志により、文学者東恩納寛惇の撰文を医師山城正心が書し建立された。幸いにも大戦の戦禍を生き延びたが、損壊がはげしく倒壊の危険を憂慮して、平成11年再建委員会委員長長田紀春先生らのご尽力により、同じ場所に新たな碑が再建された。

資料によるとわが祖父村田精成は明治36年第14期生として卒業している。当時は教習所で学んだ後に長崎か熊本での医術開業後期試験に合格せねばならず、勉学の努力と同時にある程度の財力が必要だったようである。わが祖父の場合はこうだった。祖父は三男だったため、親からの財産は一切なかった。幸いにも妻の実家が裕福だったので、そこから財政的援助を受けて医師になった。当時の往診は馬に乗って行っていたが、馬が好きになり好きが昂じて馬で事業を目論んだらしい。残念ながら事業は失敗し借金を作り、借金返済のために待遇の良い村を転々とした。返済が終わって後故郷の今帰仁村で村医として働き、終戦直前には郵便局に3万円の貯金があった。この額は村で一番多かったそうである。当時の一円が今のどのぐらいの価値があるか私には判断できないが、円の下に銭という単位があったことから考えると大金であったのだろう。大戦中は国が軍資金を得るために国民に郵便貯金を奨励していたとのことである。

不幸な事に沖縄は終戦後米国の統治下に入ったため、この郵便貯金は長い間凍結された。やっと払い戻しがされたのは戦後十数年以上たってからのことで、なおかつその当時の貨幣価値に換算されることなしに、終戦時の額に利息が付けられただけだと聞いている。

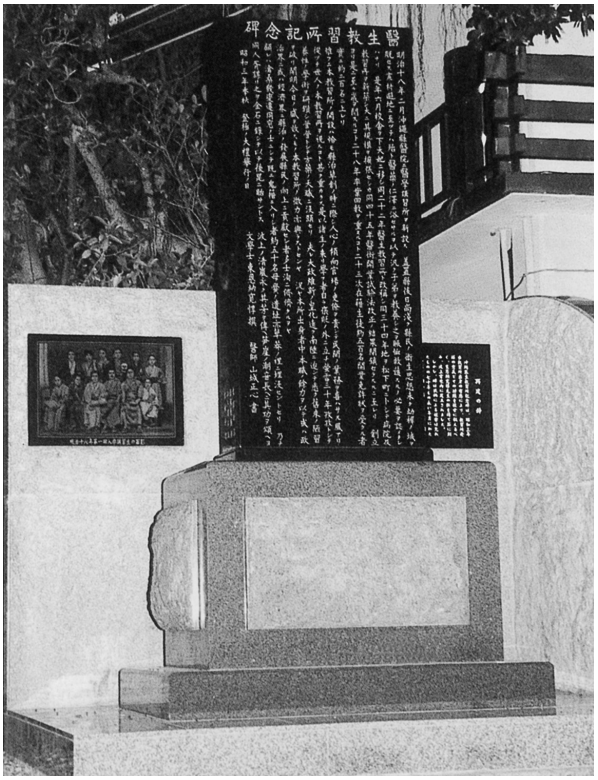
そんな訳で、ある程度裕福な家の子であったはずの父は、青年期金銭的には苦労したようである。学徒動員、終戦、結婚、2児（私が次男）をもうけてから歯科医師を目指し東京の大学へ進学した。学生時代三男も誕生した。当時は沖縄から本土への送金は額の制限があったこともあいまって、一家5人は随分と貧乏した。私は2歳から小学校へ上がるまで東京で暮らし

た。家が貧乏であることは子ども心にも理解できたが、つらい思いも随分と経験した。今ではその経験があればこそ、贅沢を戒める心ができたと感謝しているが。

話がだいぶずれて来たが、脱線ついでに面白いエピソードを特別増刊号から拾ってみる。教育者でもあった東恩納寛惇の嘆きである。（昭和４年記）明治当時世間は、医生教習所生を師範学校や中学の学生に比べて低く見ていた。後者に入れない人が多く行ったからで、規律もかなり緩やかであったらしい。しかし、後年の沖縄の政治や経済を支えたのは主に医生教習所出身の者達であったとのこと。中学や師範の教育が、厳しい割には教育の実効が上がっていないと嘆いているのである。試験での秀才が実社会では必ずしも成功者になっていないのは、当時も今も変わらない。

さて話を元にもどそう。無念なことが多かったはずの祖父の人生。父も実は医学を目指したかったが、一人前になるのには時間がかかるのでやむなく歯科医の道を選択したとのこと。それらの事を聞きながら私は育った。今にして思えば私が医学の道を選んだのは、祖父や父の無念を晴らすためだったのかも知れないと思えてくる。理由はともあれ記念碑を見たことが医学への動機付けの１つになったことは確かである。それに気づいた時、私は双子の娘たちを連れて碑を見に行き祖父や父の話をした。碑の霊験は今なお顕在で、長女は今医学の道を進み、次女は妻を見習って薬剤師になり今春就職した。碑を作る際に寄付金を寄せた祖父は、孫やひ孫の心に影響を与えるとはよもや思いもしなかったであろう。しかし、名前を残すというのはそういうことなのかも知れない。

県医師会の理事会の折、会館建設で費用が足りなくなったら寄付を募って名前を明記するのはどうかという案が出た。私は発言を差し控えたが、案が実現されたらまだ見ぬ我が子孫のために進んで寄付しようと心ひそかに思った。



沖縄医生教習所碑

随筆

山から海へ

独立行政法人国立病院機構琉球病院
院長 村上　優

30数年ぶりに沖縄へ赴任して2年が過ぎます。充実して20年が過ぎたかと感じる時間でした。仕事の上では多くの人々の協力を得て医療観察法など司法精神医学とアルコール・薬物依存の診療体制も整いつつあります。新米医師として石垣島の八重山病院で右往左往していたころと異なり、沖縄外に出る機会も多く、十分に沖縄生活を楽しんでいないのが残念です。

この6年間は医療観察法制度の立ち上げを支援するために色々なところを訪れ生活をしました。琉球病院に来る前は岩手県の花巻病院に1年赴任したのですが、仕事は無論のこと？、そこではスキーに憑かれて時間があれば安比スキー場を訪れていました。おかげで全くのビギナーが、目もくらむような上級コースの急斜面を滑り降りるまでになりました。もちろんゆっくりですが。夏場は鳥海山や早池峰山、わが国でも有数のブナ原生林がある和賀岳などに登って、頂上の景観や高山植物に魅了されていました。東北の森の深さは吸い込まれるような不安感と、そこに身をしっかりおくと安堵感が訪れます。そういえば山遊びが得意で、高校時代はその身軽さで軽い岩登りも学び、学生時代は単独行でキャンパーやピークハンターでしたが、30歳以降は沢登りと渓流釣りに夢中になっていました。常に遊びに、生活に山がありました。若いころは中村哲医師に誘われて、彼が後に赴任することになるペシャワールを経てヒンズークッシュの嶺々に山遊びに出かけたときもありました。

さて中村哲医師は1983年よりパキスタン北西辺境州のペシャワールでのハンセン病根絶計画にはじまりアフガン難民医療、アフガニスタン東部山岳地域での医療活動や、大旱魃と飢饉を前にした水事業をしていました。9.11以降はアフガニスタンでの活動が知られるところになり、第1回沖縄平和賞もいただきました。私は大学の1年後輩ですが、前任の事務局長が癌で早逝した後を受けて、1992年よりペシャワール会のお手伝いをする様になりました。難民医療から、水事業、灌漑事業から農業まで中村哲医師の事業が拡大すると、それをバックアップするペシャワール会事務局の作業も飛躍的に増えて、私も何が本業か分からぬ生活を送っていました。しかし中村医師に連れられてアフガン現地に行けば岩石砂漠に山々がそびえ、冷徹な美しさが目に焼きつきます。そこにいる不思議さや人々の素朴な営みが、戦争や旱魃飢饉という命をめぐる葛藤を超えて迫ってくるのが不思議でした。山のある風景、最も私が自然に和む世界かもしれません。

それが縁あって沖縄に赴任となり2年が過ぎるのです。やんばるの山に入る機会はありますが、これまで親しんだ山風景ではありません。人生の一部になっていたペシャワール会の手伝いを通して中村哲医師にかかわることもできなくなりました。その分、エネルギーが仕事へ注がれるようになり、「過剰に」働いているようで、身体的にも精神的にも健康さや寛容さを失っている気がします。本来、寛容な沖縄に来て、仕事の虫にならなくてもよいはずが・・・と。

目を転じれば周囲は本当に美しい海です。30年前の石垣の海とは比べ物にならないとは言いますまい。何時までも山遊びや生活を憧憬しても病気になるばかし、沖縄に来てすぐにシーカヤックを始めると決め、牧港にある専門店を訪れました。あまりの初心者に店員はシーカヤックを勧めず、シットオンタイプのカヤックを勧めます。リーフの内側で安全にとの配慮ですが、私は少し不機嫌でした。シーカヤックはスマートで綺麗で淑女の印象ですが、シットオンタイプのカヤックは太目のおばさんのようだったからです。実際に乗ってみると陽気なおばさん風情です。それから時間を見つけては、本で学習し一人でリーフに漕ぎ出すのですが、初めは恐

る恐る、段々、生来の無鉄砲が顔をのぞかせます。一人乗りから二人乗りも手にいれて、万座毛や真栄田岬、金武湾、伊計島、屋我地、本部などを根城に海の上を漂う快感は開放感にあふれます。漁船に助けられたことをきっかけとして、今は海の怖さも少し感じて慎重になりつつあります。指導者や一緒に海に行く仲間が必要なのでしょうが、他人に合わせてスケジュールが組めない忙しさが災いしているのか、他人に合わせることができない我ままな性格が災いしているのか、機会がつかめないままです。水平線と同じ目線から周囲の海や彼方の陸をみる美しさは、一人だから体験できる自由気ままさに由来するかもしれないと理屈を並べています。

カヤックは上半身優位の運動で、下半身の運動のために思いついたのが自転車でした。これも颯爽としたロードレーサーに乗る人々の多さに触発されて、また牧港の専門店に行きました。今では名護から辺戸岬までの西海岸を気分に応じて行き来するのが楽しみです。初めは東海岸を走っていたのですが、あまりのアップダウンに乗っているより押していることが多くて前に進まず、西海岸を専らにしています。それでも颯爽とヘルメットをかぶった「若者とおぼしき人」に追い抜かれますが、先でヘルメットを脱いで休んでいるその人をみると、私より高齢の方が結構いるのです。

ここまで書いて、冒頭で「沖縄を十分に楽しんでいない」と書いた矛盾に気がつきました。そういえば、何でも夢中になりすぎる性癖が楽しめない理由です。アルコール依存という性癖を変えることを生業にしている自分自身が性癖を変えることの困難さを感じています。出会いで人は変化すると信じていますので、山ではなく海遊びの同好の士と出会えることを心待ちにしています。

カヤックを楽しむ大鶴先生親子

原稿募集！

プライマリ･ケアコーナー（2,500字程度）

当コーナーでは病診連携、診診連携等に資するため、発熱、下痢、嘔吐の症状等、ミニレクチャー的な内容で他科の先生方にも分かり易い原稿をご執筆いただいております。

奮ってご投稿下さい。